

新勅撰和歌集における秋部の構成と特質

岩 崎 禮 太郎

新勅撰和歌集⁽¹⁾の秋部（巻第四 秋歌上、巻第五 秋歌下）の歌を、配列順に主題によつて分類すると、次のとおりである。

〔秋歌上〕立秋3、秋風7、露1、秋風1、秋思1、秋風2、七夕13、秋思1、萩3、秋思1、松虫3、萩4、秋思1、萩6、女郎花4、藤ばかり1、薄4、荒れた庭2、朝顔1、秋月22、田家秋興1、霧6

（秋上 88首）

〔秋歌下〕秋月14、秋夜2、稻刈1、秋思1、秋田1、鹿11、菊7、雁2、きぬた10、初霜1、月2、紅葉2、時雨2、紅葉1、木枯1、紅葉17、暮秋4、九月尽2

（秋下 81首）

これを八代集における秋部の歌の主題配列一覽に比べると、次の相違が明らかとなる。

（一）新古今集にあつて新勅撰集にない主題。

まがきの花（新古今一首） 秋の野の花（新古今三首） かるかや（

新勅撰和歌集における秋部の構成と特質

千載四首、新古今一首） 秋夕（後撰三首、千載三首、新古今十首） 稻妻（新古今二首） 鶉（後拾遺二首、新古今三首）
（二）八代集のいづれにもなくて新勅撰集にある主題。
荒れた庭（二首） 田家秋興（一首）

二

この新勅撰集における秋部の構成と特質とについて、次に（一）から（五）までの項目に分けて考察することとする。

（一）新しい主題の歌の入集

八代集においてはなかつた主題で、新勅撰集において初めて採り上げられた主題に

「荒れた庭」（二首）と「田家秋興」（一首）とがある。

「荒れた庭」という主題の歌と認めた二首は、秋上の、

閑庭萩をよめる

藤原成宗

249 いく秋の風の宿りとなりぬらん跡たえはつる庭のをきはら

題しらず

前大僧正慈円

250ぬしはあれど野となりけるまがきかなをがやが下にうづらな
くなり

である。なお、そのすぐ前に置かれている歌、

閑庭薄といへるころをよみ侍ける

藤原信実朝臣

248まねけとて植ゑしすすきのひともとにとはれぬ庭ぞしげりは
てぬる

は、「すすき」という主題の歌四首の中の最後の歌であるが、「荒
れた庭」の歌であるとも見ることができ、

ところで、八代集の中で「荒れた庭」を詠んだ歌としては、

古今・秋上248僧正遍昭「里はあれて人はふりにし宿なれや庭もま
がきも秋の野らなる」(岸上慎二氏は「秋の野」を主題とした歌
としておられる。)

千載・秋上268公任「ときしもあれ秋ふるさとにきてみれば庭は野
べともなりにけるかな」(岸上氏は「秋思」を主題とした歌とし
ておられる。)

がある。

右の新勅撰250の歌は、前掲の古今248僧正遍昭の歌、および、

古今・雑下972よみ人しらす「野とならばうづらと鳴きて年はへん
かりにだにやは君はこざらん」(伊勢物語「野とならばうづらと
なりて鳴きをらん狩にだにやは君はこざらん」)
との二つの歌を本歌としていると考えられる。

次に、新勅撰249の歌は、

古今・春下76素性法師「花ちらす風のやどりはたれかしるわれに

教へよ行きて恨みむ」

新古今・恋四四藤原保季「かたみとてほのふみわけし跡もなし来

しは昔の庭のをきはら」

をふまえており、上句の「いく秋の風の宿りとなりつらん」によつ
て、長い間訪れる人ともなく、ただ風の宿りとなっていたという
空虚な感じを余情としている。

このように、249の歌も250の歌も、ともに表現面は平明であるが、
それぞれの歌がふまえているものと歌を連想させるとともに、自然

と人事、過去と現在、幻想と現実とを交錯させて、物語の世界を表
わした歌になっている。このような「荒れた庭」の歌二首を定家が
ここに配置した構成上の効果を高く評価することができ、

次に、「田家秋興」という主題の歌は、秋上の、

白河院鳥羽殿におはしましけるに、田家秋興といへる

心ををのこどもつかうまつりけるに

権大納言宗通

274しづのをのかど田の稲のかりにきてあかでもけふをくらしつる
かな

の一首である。(作者は金葉集初出歌人である。)この歌に詠まれ
ている内容と通ずるところのある歌を八代集に求めると、

千載・秋上255源俊頼「さまざまに心ぞとまるみやぎの花のいろ
いろむしのこゑぞゑ」

千載・秋上256八(詞書)野花留^ム客^ヲといへる心をよめる源俊頼「
秋来れば宿にとまるを旅ねにて野べこそつひのすみかなりけれ」
(以上の二首は「秋の野」を主題とする歌群中の二首である。)

をあげることができる。

思うに、秋の歌となると、とかく哀愁の色調一色に流されがちであつて、秋の自然を楽しむという一面が見捨てられがちになる。そこで、秋の自然を楽しむという気持を強く出したこれらの歌は、そのような単調な傾向にすべて流されてしまうのを救つて、秋の歌の構成を多面的立体的なものにする役割を果たしていると言える。このように新勅撰集274の「田家秋興」の歌は、重要な役割を果たしていると考えられるのである。

(2) 主題ごとの構成の特色

主題ごとの構成に著しい特色を發揮しているもののいくつかを次にあげる。

その中で「七夕」の歌十三首の構成については、別稿⁽³⁾において考察し、新古今集の「七夕」の歌十五首の構成の模倣に陥ることなく、配列の妙を得て独自の世界を構成していることを指摘した。

新勅撰集の秋部における主題ごとの構成の特色という点について、まず目につくことは、「秋思」の歌五首の分割配置である。

そもそも八代集において「秋思」という主題の歌は、後撰集の秋中に四首(331~334)と秋下に一首(423)、千載集の秋下に四首(301~304)の一群と二首(350 351)の一群、新古今集の秋上に三首(367~369)の一群があつた。このように一つの勅撰集に一群あるいは二群を置くという構成であつたのに、新勅撰集においては五首を一首ずつ切り離して配置している。そのそれぞれの歌の配置を見てみよう。

221秋といへばものをぞ思ふ山のはにいさよふ雲の夕暮の空(式子

内親王)

新勅撰和歌集における秋部の構成と特質

この歌は「七夕」の歌の十三首と「萩」の歌三首との間に置かれ、「七夕」という天上に関する歌群が終つて地上の秋の歌に転換しようとするに当たつて、地上における主情性を、特にこの場合は天上に近いところの「山のはにいさよふ雲の夕暮の空」に向かつてのもの思い」という主情性を流し込んでいると考えられる。

225いかにしても思ふ人のすみかには秋よりほかの里をたづねん(相模) (定家本相模集では第五句は「もとめむ」に、詞書は「むしのこゑをききて」となっている。久保田淳氏「新古今和歌集全評釈、第二巻」四〇三ページ)。

この、秋からの脱出を願う発想の、苦しい抒情の歌は、「萩」の歌三首と「松虫」の歌三首との間に置かれている。その前の、

(223) 萩の葉に風の音せぬ秋もあらば涙のほかに月は見てまし

(入道二品親王道助)

(224) をぎの葉にふきとふきぬる秋風の涙さそはぬ夕暮そなき(

公經)

の「萩」の歌は強い感傷的な抒情のあふれた歌であつて、次の226の歌は「萩の夜をこゑもすがらにあくる松虫」と詠んでいる歌である。その境目にこの225の歌が置かれている。

次に、

205秋といへば心の色もかはりけりなにゆるえとも思ひそめねど

(通親)

の歌は、「秋風」を主題とする歌の中に割り込ませて配置され、

233白露と秋の花とをこきまぜてわくことかたきわが心かな(柿本人麿) (柿本集では右のとおりであるが、万葉集卷十において

は、詠露「白露と秋の萩とは愁ひみだれわくことかたきわが心かも」となっている。）

の歌は、「萩」の歌十首の間に割り込ませて置かれ、

298唐衣ほせどたもとの露けきはわが身の秋になればなりけり（詞書「寛平御時きさいの宮の歌合の歌」、よみ人しらず）

の歌は、「稻刈」の歌一首と「秋田」の歌一首との間に置かれている。そうして、これら205 233 298の歌は、それぞれその前後の歌が平淡な歌でしかも主情性に乏しく、これらの歌がそこに強い主情性を流し込んで変化を与えるはたらきをしていると考えられる。

次に、新勅撰集の秋部の「霧」を主題とした六首に注目しよう。

八代集において「霧」を主題とした歌の数は、後撰3、後拾遺3、金葉2、詞花1、新古今6であって、新古今集よりも規模を縮小した新勅撰集における六首は、数の上から見て重視されていることになる。

新勅撰集における「霧」の歌六首の中に、「煙」を詠み込んだ歌が三首、

276夜半にたくかびやがけぶり立ちそひて朝霧深しをやまだの原

(慈円)

277もしほやくけぶりも霧にうづもれぬすまの関やの秋の夕暮

(慈円)

278けぶりだにそれとも見えぬ夕霧になほしたもえのあまのもしほと並べてあるのは著しい特色である。

火（詞書「海霧といへる心を」、知家）

ところで、八代集における「霧」を主題とした歌で「煙」を詠み

入れた歌は、

後撰・秋中・よみ人しらず「浦ちかくたつ秋霧は薄しほやく煙とのみぞ見えわたりける」

だけである。この歌においては霧が煙のように見えるというのであって、この煙は実際の煙ではない。ところが、新勅撰集における煙はみな実際の煙であって、276 277 278の三つの歌は「煙と霧」とのそれぞれ三様の風景を詠んでいる。

なお、右の276 277 278の三つの歌の前後の歌は、

275いとどしくもの思ふ宿を霧こめてながむる空も見えぬけさかな

(藤原道信)

279ふみわけんものとも見えす朝ぼらけ竹のは山の霧の下露

(家隆)

280をぐら山ふもとをこむる夕霧にたちもらさるるさをしかのこゑ

(西行法師)

であって、新古今集における、

村雨の露もまだひぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕暮（寂蓮法師）

ふもとをば宇治の川霧立ちこめて雲に見ゆる朝日山かな（公実）

のような、真木の葉のあたりから霧が立ちこめるとか、川霧がふもとに立ちこめている峰の上部が空に高く見えるという風景はなく、一面に霧の深い趣をひたすら感じさせるような歌ばかりで統一して構成しているのが特色である。

(3) 平淡な歌

新勅撰集秋部には、古歌・先行歌の内容にきわめて類似した歌が

かなり多く採られている。次に例をあげる。

195きのふにはかはるとなしに吹く風の音にぞ秋は空にしらるる

(師頼)

(参考歌) 古今・秋上169藤原敏行「秋きぬとめにはさやかに見え
ねども風の音にぞおどろかれぬる」

197くれゆかば空のけしきもいかならんけさだにかなし秋の初風

(家隆)

(参考歌) 後撰・秋上221よみ人しらず「秋風のうちふきそむる
夕ぐれは空に心ぞわびしかりける」

198音たてていまはた吹きぬわが宿のをぎのうは葉の秋の初風

(為家)

(参考歌) 拾遺・秋139貫之「をぎの葉にそよぐ音こそ秋風の人に
知らるる初めなりけれ」

199あしびきの山下風のいつのまに音ふきかへて秋は来ぬらん

(藤原實季)

(参考歌) 千載・秋上25侍従乳母「秋たつとききつるからにわが
宿のをぎの葉風の吹きかはらむ」

200夏すぎてけふやいくなりぬらん衣手涼し夜半の秋風

(教実)

(参考歌) 拾遺・秋11安貴王「秋立ちて幾かもあらねどこのねぬ
る朝けの風はたもと涼しも」

それぞれの参考歌と比較すると、右の新勅撰集の歌はおのずから感
じられる情感を重んじた表現に変化させてはいる。しかしながら、
大きく見れば古歌・先行歌の発想にきわめて類似している歌であっ

新勅撰和歌集における秋部の構成と特質

て、このような歌のあることが、新勅撰集に平淡な歌が多いという
印象を与える原因となっている。

(4) 新古今歌風の系譜に連なる歌

前項(3)で述べたような平淡な歌にまじって新古今歌風の系譜
に連なる歌があることに注目されるのである。

そもそも、新古今歌風の特徴を最もよくそなえている歌は、巧緻な
詞づきを用い、詞を複雑にからみ合わせ、その喚起するイメージ
を錯綜させることにより、自然と人事、過去と現在とを交錯融合さ
せ、耽美的幻想的陶酔的な境地に誘い込む気分的な美しさを漂わせ
た歌であった。そのような歌は小島吉雄氏によって気分的象徴歌と
名づけられている。新勅撰集の秋部の歌で気分象徴歌をあげると、
次の287の歌がある。

秋歌よみ侍けるに 侍従具定母⁽⁵⁾

287うき世をもあきのすゑ葉のつゆの身におきどころなき袖の月
かけ

この歌における「あきの末葉」の語は、既に、千載・秋下334式子内
親王「草も木も秋の末葉は見えゆくに月こそ色は変らざりけれ」
新古今・雑上157行宗「花すすき秋の末葉になりぬればことぞとも
なく露ぞこぼるる」

に用例があり、「つゆの身」「おきどころなし」については、
金葉・雑上62「草の葉になびくもしらで露の身のおき所なくなげ
くころかな」

の用例がある。

この287の歌は、右にあげた金葉集の歌の影響を受けていると思わ

れる。侍従具定母（＝俊成女）はこの歌において、「あき」を「秋」と「鮑き」との掛詞として用い、「秋の末葉の露」を自然の景物としての意とわが身の晩年の消えそうな命の意との両方を表わし、「露の身の涙」という述懐と袖の涙に宿る月の光のイメージとをからみ合わせて、氣分的象徴歌としている。

次に、

題しらず

如願法師

316をしかのなくねもいたくふけにけりあらしののちの山の月の月

月前菊といへるころをよみ侍ける

鎌倉右大臣

316ぬれてをる袖の月かげふけにけりまがきの菊の花の上の露の二首における「ふけにけり」の表現に注目しよう。

右の「ふけにけり」の表現を考えるに当たって、和歌におけるこの動詞「ふく」の幾つかの用例に当たることから始めよう。「秋ふけぬ（新古今・秋下517）」「さよふけて（新古今・秋下483）」「わが世のいたくふけにけるかな（拾遺・雜上436）」「わがよやいたくふけぬらん（新勅撰・秋下291）」は、比較的平明な表現である。ところで、右の新勅撰集の316に似た表現は、

新古今・秋上420定家「さむしろやまつ夜の秋の風ふけて月をかたく宇治のはし姫」

新古今・秋上420源家長「秋の月しのに宿かる影たけてをささが原に露ふけにけり」

にあったのである。420の「秋の風ふけて」の意味は「秋の夜の風の

様子に夜ふけを感じ⁶」であると考えられる。次に、425の「露ふけにけり」の意味は、ある注釈書のように「露が深く置き、夜も更けたよ」とも言えるであろうが、感じ方としては「露」と「夜」とを二元的にとらえたのではなくて、「露の様子に夜ふけを感じたよ」の意であり、窪田空穂氏が「置く露は夜更けを思わせて繁くなつてきたことであるよ」としておられるのを適訳と考えたい。この「露ふけにけり」は、久保田淳氏が「秀句的な表現であり、野心的な表現であつたであろう。」と言われるとおりであつて、繊細微妙な感性に訴える表現である。

右にあげた新勅撰集の316の歌のその部分は、それぞれ「鹿のなくねが夜ふけを感じさせるようになったよ」「袖の月かげが夜ふけを感じさせるようになったよ」という意味であつて、ともに新古今歌風の特徴である、繊細な感覚に惹かれ、繊細な感受性に訴える表現である。

(5) 新しい情感を盛った歌の入集

右に指摘した以外の歌で、特に新しい情感を盛った歌を次にあげてみる。

養和のころほひ、百首歌よみ侍ける秋歌

権中納言定家

256あまのはら思へばかはる色もなし秋こそ月の光なりけれ

右の歌は、定家が初学百首（養和元年一一八一・定家二〇歳のこと）の中一首として詠んだ歌である。この歌は新勅撰集の歌の平淡味を示す歌として引かれることがある。かの、ことばとことばが複雑にからみ合わされて複雑な夢幻味をかもし出す、いわゆるもみも

みとした気分的象徴歌とは異なっていて、この歌は、一見したところ、平明な表現の歌であると言えそうである。

ところで、この歌は、意味内容の上で、

(A) あまのはら……思へば (B) かはる色もなし

(C) 秋こそ月の光なりけれ

という構造をもっており、(A)と(B)との間には∧秋といへども∨という語句の省略があり、(B)と(C)との間には∧そうではあるが∨という語句の省略があると考えられ、それぞれの間に含蓄があるのである。この歌は、「あまのはら……思へば……かはる色もなし」と、いちおう打ち消しておきながら、「そうではあるが、秋は月の光に象徴されている」「月の光が天空に遍満してきている秋の感じの生きた象徴になっている」という、鋭い感覚をもちながら歌境に沈潜したところから生まれた微妙な深い感じを表現している歌なのである。したがって、単に平淡な歌という批評でもって新勅撰集の多数の歌と一括するわけにはいかないのである。なお、この歌は、直観的に色彩による微妙な感覚を求めようとして、最終的には色彩だけでないところの微妙な深い感じの把握に到達している。この意味において、峯村文人氏が、この歌を新古今集の「三夕の歌」の一首、

さびしさはその色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕暮

(秋上、寂蓮法師)

の源泉であると指摘されたことを首肯することができる。

次に、新勅撰集の秋歌において、古歌・先行歌の内容にきわめて類似した歌が多く採られていることが、この和歌集に平淡な歌が多

新勅撰和歌集における秋部の構成と特質

いという印象を与える原因となっていることは(3)において述べたとおりであるが、その場合、古典の影響を大きく受けている歌でも、よく見れば本歌とのわずかな差異が新しい情感を出している歌の例を一つあげておこう。

家に百首歌よみ侍けるに早秋の心を

藤原信実朝臣

202 よる波の涼しくもあるかききたへのそでしのうらの秋のはつ
かせ

右の歌は洞院撰政家百首(貞永元年1123)の中の一詩として詠まれた歌である。本歌は、

古今・秋上70貫之「川風の涼しくもあるか打寄する浪とともにや
秋は立つらむ」

である。本歌における涼しさが「川風」の涼しさであるのに対して、202の歌は「よる波」の涼しさという視覚に訴える涼しさとして打ち出しているところが新しい感覚である。そうして、「そでしの浦」に「袖の裏」の意を含めて、袖に吹く風の涼しさをも感じさせるという効果を發揮する歌ともなっているのである。

次に、

潤底鹿といふ心をよみ侍ける

正三位知家

309 さを鹿の朝ゆく谷のむもれ水かげだに見えぬつまを恋ふらむ

(本歌)金葉・恋下511よみ人しらず「もらさばや細谷川のうもれ水かげだに見えぬ恋に沈む」と

の歌は、巧みな本歌取りの歌であって、「谷のむもれ水」という場

面と「さを鹿」の朝の動きと「かげだに見えぬつまを恋ふらむ」という推量との結びつきが緊密になされていて、清新な情感が漂っている。

次は、

百首歌の中に

式子内親王

345秋こそあれ人はたづねぬ松の戸をいくへもとちよつたのもみ

ちば

の歌は、「つたのもみちば」が「松の戸」をいくへもとちたイメージを描きながら、秋における孤独な哀感を強く訴えた歌になっている。

また、

秋の歌よみ侍けるに

鎌倉右大臣

319わたの原やへのしほちにとぶかりのつばさの波に秋風ぞ吹くの歌は、遙かな海上を飛ぶ雁のつばさを連ねているさまを、つばさの波と表現して、美しい絵画的情趣を表わし、そこに秋風が吹いているというさわやかさもつた雄大な景を展開させている。

三

新勅撰集の秋の部において、古歌・先行歌の心をそのまま引き継ぎ、新鮮味の乏しい歌がかなり多いことは、二の(3)においてあげた例歌によっても、また、

253あまつ空うき雲はらふ秋風にくまなくすめる夜半の月かな

(公能)

(参考歌) 金葉・秋暈、新古今・秋上但経信「月かげのすみわたるかな天の原雲ふきはらふ夜半の嵐に」

257あしびきの山の嵐に雲きえてひとり空ゆく秋の夜の月(教実)

(参考歌) 前掲253の本歌としてあげた経信の歌および

金葉・秋210源行宗「なごりなくよはの嵐に雲晴れて心のままにすめる月かな」

267松の戸をおしあげがたの山風に雲もかからぬ月をみるかな

(家隆)

(参考歌) 前掲257の参考歌としてあげた源行宗の歌

268あづまよりけふあふさかの関こえてみやこにいつるもち月のこま

(良経)

(本歌) 拾遺・秋170貫之「あふ坂の関の清水にかげみえていまや引くらむ望月の駒」

を見ても、うかがうことができる。このような歌の多いことが、新勅撰集に温雅ではあるが平淡で平板な歌が多いという印象を与える原因となっているようである。

しかし、このような歌ばかりではなくて、新古今歌風の系譜に連なる気分的象徴歌がまじっていることは、二において指摘したとおりである。また、二において指摘したように新しい主題の歌の入集、新しい情感を盛った歌の入集もなされており、主題ごとの構成においても配列の妙を得て独自の世界を構成している。このように撰歌と構成とに創意工夫が加えられていることがうかがえるのである。

[注]

1 久曾神昇氏・樋口芳麻呂氏校訂「新勅撰和歌集」(岩波文庫・昭36年)による。

貞永元年（一二三二）十月を形式的奏覧日とし、天福二年（一二三四）六月を奏覧日とし、文暦二年（一二三五）三月を実質的完成日と考えておく。（岩波文庫、解題）

以下、新勅撰集と略称する。

2 有吉保氏『新古今和歌集の研究・基盤と構成』二八一・二八二ページにおける岸上慎二氏著『中世文学Ⅱ』よりの引用による。ただし、新古今集の歌の主題については、久保田淳氏『新古今和歌集全評釈、第二卷第三卷』によった。

3 拙稿『新古今集・新勅撰集における七夕の歌』（梅光女学院大学、日本文学研究、第十六号、昭55・11月）

4 小島吉雄氏『新古今和歌集の研究、統篇』一四〇ページ

藤平春男氏『新古今歌風の形成』一〇九ページ

5 侍従具定母は俊成女のことである。この287の歌は、俊成卿女集・洞院撰政家百首に所収

6 風の様子に夜ふけを感ずる描写としては、源氏物語、夕顔の巻に「夜中も過ぎにけむかし、風のやあらしう吹きたるは。まして松のひびき木ぶかくきこえて、けしきある鳥のからごゑになきたるも、ふくろふはこれにやとおぼゆ。」がある。

玉上琢弥氏『源氏物語評釈』によれば、この部分は『白氏文集』第一、諷諭、凶宅の詩「長安多シ旋風シ」……日暮多シ旋風シ」に拠っている。

7 窪田空穂氏『完本新古今和歌集評釈、上巻』三六九ページ

8 久松潜一氏「藤原定家」日本歌人講座、第三卷、中世の歌人

I、二四七ページ

9 峯村文人氏「定家の作風形成」言語と文芸、四十六号、昭41・5
10 注9に同じ。

新勅撰和歌集における秋部の構成と特質